次の文章は、『竹取物語』の始めの部分である。読んで、あとの問いに答えなさい。

今は昔、竹取の翁といふ者ありけり。野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことに使ひけり。名をば、さぬきの造となむいひける。その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。①あやしがりて寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いと②うつくしうてゐたり。

翁いふやう、「われ朝ごと夕ごとに見る竹の中におはするにて知りぬ。1子になり給ふべき人なめり。」とて、手にうち入れて家へ持ちて来ぬ。妻の嫗にあづけて養はす。うつくしきこと、限りなし。いと幼ければ籠に入れて養ふ。

（注）さぬきの造＝翁の名前。　三寸＝約九センチメートル。　節をへだててよごとに＝竹の節と節の間の空いているところごとに。　金＝黄金。　かたち清らなること＝顔立ちの美しいこと。　心地あしく＝気分が悪く。　止みぬ＝なくなった。　慰みけり＝気持ちが晴れた。　勢猛の者＝勢いのさかんな、お金持ち。　三室戸斎部秋田＝人の名前。　なよ竹＝しなやかな竹。

【第一・第二段落の現代語訳】今となっては昔のことだが、竹取の翁という者がいた。野や山に分け入って竹を取っては、いろいろなことに使っていた。名前を、さぬきの造といった。（ある日、）その竹の中に、根もとが光る竹が一本あった。（　①　）近寄って見ると、竹の筒の中が光っている。それを見ると、三寸ほどの人が、とても（　②　）様子で座っていた。

竹取の翁、この子を見つけて後に、竹をとるに、節をへだててよごとに金ある竹を見つくることA重なりぬ。かくて翁やうやう豊かになりゆく。この児養ふほどに、すくすくとB大きになりまさる。

（中略）

この児のかたち清らなること世になく、家の内は暗き処なく光満ちたり。翁心地あしく苦しき時も、この子を見れば苦しき事も止みぬ。腹だたしきことも慰みけり。翁、竹を取ること久しくなりぬ。勢猛の者になりにけり。この子いと大きになりぬれば、名をば三室戸斎部秋田を呼びてつけさす。秋田、なよ竹のかぐや姫とつけつ。

（『竹取物語』による）

翁が言うことには、「私が毎朝毎晩見ている竹の中にいらっしゃるので、わかった。（私の）子におなりになるはずの人であるようだ。」と言って、手の中に入れて家へ連れて帰った。妻のおばあさんにあずけて育てさせる。（　②　）ことはこの上ない。とても小さいので、かごに入れて育てる。

【このあとのあらすじ】かぐや姫の美しさのうわさは世の中に広まり、身分の高い者も低い者も、なんとかしてかぐや姫と結婚したい、ひと目見たいと思って、翁の家のまわりに集まってくるようになった。中でも熱心に通い続けたのは、五人の身分の高い貴公子たちであった。翁は、年老いた自分が生きているうちに、だれかと結婚して幸せになってほしいと、かぐや姫に話す。

問一 次のA～Cは本文中のことばである。現代仮名遣いに直し、すべてひらがなで書きなさい。

A　いふ　　B　ゐたり　　C　やうやう

A

B

C

問二 ①あやしがりて・②うつくしうての意味として最も適切なものを、次からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア　不思議に思って　　イ　こわがって　　ウ　かわいらしい　　エ　かしこい

①

②

問三 1子になり給ふべき人なめりとあるが、翁がこう考えたのはなぜか。次の文の［　］に入ることばを、翁の会話の中から十七字で抜き出しなさい。（句読点も一字に数える）

その子が、自分が［　］から。

問四 A重なりぬ・B大きになりまさるの主語（だれがそうしたのか）として最も適切なものを、次からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア　竹取の翁　　イ　妻の嫗　　ウ　この子　　エ　秋田

A

B

問五 「名をば、さぬきの造となむいひける」の文では、「なむ」があるため、文の終わりが「いひけり」ではなく「いひける」になっている。これと同じように、「なむ」によって文の終わりが変わっている文を、第一段落からもう一つさがし、初めの五字を書きなさい。（句読点も一字に数える）

問六 本文の内容に合うものとして最も適切なものを、次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　翁は、竹の中から見つけた子に、自分ですぐに名前をつけた。

イ　翁は、見つけた子を家に連れて帰り、妻にあずけて育てさせた。

ウ　見つけた子は体が弱く、大きくなるまでに長い年月がかかった。

エ　翁は、子を見つけてからは、竹を取る仕事をやめてしまった。

問七 この子は、翁にとってどのような存在だったか。「豊か」「苦しき」という二つのことばを使って、四十字以上、五十字以内で書きなさい。

解答（答えと短い解き方）

歴史的仮名遣い 標準② 竹取物語の始め

本文の読解

問一 A　いう　　B　いたり　　C　ようよう

語の頭以外の「ふ」→「う」、「ゐ」→「い」、「やう」→「よう」と直す。「ようよう」は「だんだん」。

問二 ①　ア　　②　ウ

①「あやし」は「不思議だ」。②「うつくし」は今の「美しい」とちがい、小さいものを「かわいらしい」と思う気持ち。

問三 朝ごと夕ごとに見る竹の中におはする

「〜にて」は「〜ので」と理由を表す。毎朝毎晩見ている竹の中にいらっしゃったので、自分の子だとわかった。

問四 A　ア　　B　ウ

A：文の初めに「竹取の翁、」とある。B：直前に「この児養ふほどに」とある。

問五 その竹の中

「なむ」があるので、文の終わりが「ありけり」ではなく「ありける」になっている（係り結び）。

問六 イ

「手にうち入れて家へ持ちて来ぬ。妻の嫗にあづけて養はす」とある。名前をつけたのは三室戸斎部秋田。

問七 （例）この子のおかげで金のある竹が見つかって豊かになり、苦しき時もこの子を見ると苦しさが消える存在。

第三段落「翁やうやう豊かになりゆく」と、第五段落「この子を見れば苦しき事もやみぬ」をまとめる。